

<b>1 学校教育目標</b>	<b>2 本年度の重点目標</b>
心豊かに！いい顔 いい声 いい心	三日月スタンダードの徹底 ①豊かな心の育成 ②学力向上 ③特別支援教育の充実 ④信頼される学校づくり

達成度  
A: ほぼ達成できた  
B: 概ね達成できた  
C: やや不十分である  
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

**3 目標・評価**

**①豊かな心の育成**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・人権・同和教育が充実できたか	・「人権教室」を毎月設定し、命やなかまづくりについて考え、意識を高め、アンケートで、思いやりの項目の肯定的評価が昨年度を上回る。	・全教科、全領域で人権に関わる内容を、実態に応じて具体的な事例を用いて指導する。 ・人権教室、平和集いを学級・学年・全校で実施する。	B	人権・同和教育の年間計画を提案し、各学年に応じた取り組みを呼びかけた。また、人権に関わる問題が起きた場合は、職員連絡会等で知らせ、迅速に対応しようとした。全体的に、部活問題への取り組みが不十分であることから、学年ごとに取組を決め、実施する必要がある。	1年から6年まで、必ずするべき教材を示し、確実に学習できるように、年間計画の中に位置づける必要がある。道徳と人権教育の共通点や違いをはっきり認識し、指導するよう学習を深めるよう研修をすることが大切である。
		・居心地のよい学級づくりができたか	・QUを年2回実施し、学級生活満足群の児童の数がどの学級も70%を超す。 ・気持ちのよい挨拶ができる児童を75%以上にする。	・QUの結果分析を行い、指導に活かしたり、朝のふれあいタイム等で支持的風土作りを取り組む。 ・挨拶運動は、学校だけでなく、育友会とも協力し、家庭や地域へ働きかける。また、運営委員会ともタイアップし朝の挨拶運動を奨励する。	B	11月に行ったQUの結果、学級生活満足群の児童は57.4%と目標は下回っているが、6月に行った結果は満足群に50%だったので、7.4%改善ができています。 ・気持ちのよいあいさつに関しては、児童アンケート90.1%、保護者アンケート78.2%と、どちらも目標75%を達成することができました。	6月のQUの結果をもとに夏休みに研修を行い2学期に実践してきている。しかし、大幅な改善とまではならなかったため、引き続き朝のふれあいタイムや学級活動を通して支持的風土作りを行う必要がある。 ・挨拶運動は、引き続き運営委員会とタイアップして奨励していきたい。
	●いじめ問題への対応	・いじめのない学級・学校づくりができたか	・いじめをしない・許さない学校づくりの意識を高め、いじめの件数を昨年度より減らす。 ・生徒指導上の諸問題に対する未然防止、早期発見、早期対応に務める。	・教育相談部と連携して、心のアンケートを毎月10日をめどに実施し、いじめ早期発見と防止の徹底を図る。	B	毎月10日前後に「心のアンケート」(児童用)を行い、いじめの早期発見と防止を目指した。 ・生徒指導に関しては、情報を学年で共有したり、必要に応じて職員間で共有したりした。 ・学級で解決する事もあり、生徒指導主任や管理職まで情報が入らないこともあった。	・毎月の「心のアンケート」は続けた方がよい。小さな事でも情報が入ったり、学級経営・学年経営に生かすことができる。 ・保護者と児童どちらかが完全に納得していない感じがある場合は、生徒指導主任や管理職に情報を届けるようにすることが必要である。

**②学力向上**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の工夫改善ができたか	・授業についてのアンケートで、75%以上の児童が「よくわかる」と評価する。 ・4～6年の学習状況調査で佐賀県平均以上を目指す。1～3年の標準学力検査CRTでは全国平均以上を目指す。	・課題とまとめを意識し、3つのわかる化を取り入れた授業展開を図る。 ・算数科ではしなやかな意識した授業展開を図り、思考を深めるつなげ方を工夫する。また少数担当者が入る授業においては、児童の実態に応じた少数指導や習熟度別指導に取り組む。	B	4～6年の学習状況調査では、4年国語・5年社会以外は佐賀県平均以上の正答率だった。 ・児童アンケートでは「よくわかる」が約70%、3つのわかる化を取り入れたわかりやすい授業づくりへの取組に関して教職員のアンケートでは「あてはまる」が約89%であった。 ・校内研究では算数科においてしなやかな意識した授業展開や思考を深めるつなげ方を工夫した授業展開を各学年実施することができた。	算数科だけでなく、他の教科においても3つのわかる化を意識した授業展開をより一層図っていく。更に算数科においては、校内研究として取り上げている「しなやかな」思考力を深める手だてについて研究を進めていく。 ・指導法改善に関しては、少数指導(習熟度別を含む)を効果的に取り入れることができるように担任と相談しながら計画的に実施していく。
		・家庭学習の習慣が定着できたか	・家庭学習の習慣が身に付いている児童を87%以上にする。	・三日月スタンダードに基づき、全校で共通した家庭学習に取り組む。 ・研修部が中心となり、基本的学習習慣の重点を決め、全校で繰り返し実施していく。 ・家庭学習パンフレットを保護者へ周知する。	B	家庭学習の取り組みは、児童アンケートでは86%、保護者アンケートでは71%が身に付いていると回答があった。目標には達することができなかった。	教師アンケートでは、三日月スタンダードに基づき100%の先生方が取り組んでいる。引き続き粘り強く、啓蒙と指導に取り組んでいく必要があると考える。
	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	・ICT活用を推進することで教育の質が向上したか	・電子黒板・学習用タブレットを活用した授業を行うことで80%以上の児童が「分かりやすい」と評価する。	・電子黒板やタブレットを日常的かつ発展的に活用する。 ・校内研究会を学期に1回以上開催する。	A	ICT活用により93%の児童が、「授業が分かりやすくなっている」と回答している。電子黒板は、日常的に使っている教師が多いが、タブレットの使用頻度が低かったのが課題である。	電子黒板の機能やタブレットPCの使い方の校内研修を行い、より有効な使い方を教師が習得していく必要がある。また、プログラミング教育への理解を進めるための研修を今後持つ必要がある。
学校運営	○教職員の資質向上	・ユニバーサルデザインに視点を置いた授業づくりをすすめることで授業力は向上したか	・学校評価アンケートでユニバーサルデザインを取り入れた校内での授業研究会や研修会が充実していると自己評価している教員を80%以上にする。	・教師の指導力向上に向けて、全担任が年間1回以上研究授業に取り組む。 ・UDを取り入れた環境づくりに取り組んでいることを意識できるよう研究会等でも紹介していく。	B	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり(校内研究)の推進については、充実していると回答している職員が90%いる。	校内研究の研究教科である算数科だけでなく、他教科でも少しずつ広がりが見られることは、充実していると回答している。また、他教科でもUDの視点に立った授業づくりの推進を図っていくたい。

**③特別支援教育の充実**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○特別支援教育	・個別に支援が必要な児童への支援体制を確立できたか	・一人一人の児童理解に努め、積極的に指導・支援に取り組み、個別の指導計画を作成する。 ・全職員あがりの支援体制ができていると考える教師が80%以上にする。	・特別支援教育に関する研修会を年間2回以上実施し、どのような特性を持った児童にも対応できる教職員の知識とスキルを高めていく。 ・保護者との連携を密にして、啓蒙に努める。	B	・個別の指導計画の作成を通して支援方法を検討、評価することができた。しかし、その計画を十分に活用することには課題が残った。 ・担任からの相談を受け、校内の複数で検討する体制がやや進んだが、支援方法の検討の時間確保が十分ではなかった。	・支援方法を検討する場として位置づけられる校内委員会の組織、あり方を検討する。 ・特別支援教育の捉え方について再度確認するために、通常学級でできる支援をテーマにした校内研修を行う。
		○生徒指導	・教育相談を充実させているか	・教育相談研修会を開催し、児童理解に努め、不登校や問題行動ゼロをめざす。	・気になる児童について全職員で情報を共有したり、必要に応じてケース会議を開いたりして支援に努める。 ・スクールカウンセラーや各種専門機関と連携して、教育相談活動を充実させていく。	B	・5月に各学級の気になる子について共通理解を図るための研修会を、6月に担任との教育相談週間を、夏季休業中に小中合同教育相談研修会を実施することができた。また、2学期には「担任への手紙」を提案し、実施することができた。実施後のアンケートでは概ね好評であった。 ・11月には不登校及び不登校傾向の児童に関する共通理解を図った。 ・スクールカウンセラーによるカウンセリングも学期末を除き毎月案内を配布し、児童や保護者を対象に実施してきた。 ・登校しづらい教室に入れない児童に対しては、担任・管理職とその都度話し合いながら対応してきた。

**④信頼される学校づくり**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針	・学校教育目標の具体化と重点目標の明確化ができたか	・教育目標及び経営方針、重点取組について教職員へ周知徹底し、認知度を100%にする。 ・児童や保護者に周知し、認知度を80%以上にする。	・保護者や地域へは、学校便りやHP、育友会総会、地域懇談会等の場で説明を行い、周知を図る。 ・児童には全校朝会や学年集会等を利用して分かりやすく話をしていく。	B	・学校教育目標「心豊かに いい顔 いい声 いい心」を意識して指導を行っている教職員は100%と、全職員が学校教育目標の達成に向けて指導に当たることができた。 ・学校が、「心豊かに いい顔 いい声 いい心」を学校教育目標にしていることを知っている保護者は96.5%と、ほとんどの保護者に周知することができた。	・学校教育目標を具現化した、学級・学年目標の児童への周知は、学年間で差があるものの、平均して85.4%と、90%には至らなかった。年度当初に、学級・学年目標の周知徹底を呼び掛け、学期ごとに振り返る機会を設ける。
		○開かれた学校づくり	・学校情報の公開ができたか	・月に1回以上発行予定の学校便りや学年便りをはじめ、各種便りを通して学校情報を発信する。 ・学校HPを随時更新し、情報提供を行う。	・保護者や地域を対象に、教育活動や児童の様子など、学校情報を積極的に発信する。 ・気軽に来校でき、相談しやすい雰囲気のある学校づくりに努める。	B	学校便りや学年便りは月に1回以上、どの学年も発行し、保護者へ情報提供を行うことができた。学校HPもほぼ毎月更新し、児童の様子などを知らせることができた。HPに関しては、個人情報観点から児童の写真を掲載することに問題があるため、今後どのように更新していくか、検討する必要がある。
	○危機管理	・交通事故防止に向けての交通ルール遵守の態度を育てることができたか	・交通ルールを守り、安全に生活しようとする児童の割合を80%以上にする。	・校区内巡回パトロール(週2回)、月1回の交通安全の日の交通立番、年度初め・学期始めの交通立番を職員で実施する。 ・育友会と連携し、ヘルメット着用率100%に取り組む。	B	・93.4%の児童が交通ルールを守り、安全に生活しようとしている。 ・ヘルメット着用率は、93.0%であり、着用率を高める呼びかけが必要である。	・働き方改革に伴い、校区内パトロールは、今年度通りか週1回でも良いかと思われる。場所の精選や夏季休業中の回数など今年度またはそれ以上に減らしても良いかと思われる。

**本年度の重点目標に含まれない共通評価項目**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	・望ましい生活習慣の形成を推進できたか	・規則正しい生活習慣を身につけて、朝食摂取率を95%を上回る。	・立腰教育、ノーテレビノーゲームデーを推進すると共に、げんきカード、給食日常点検表を活用して指導をし、健康的な生活習慣の意識を高める。	B	・朝食摂取率は94%となっており、良い結果ではあるが、バランスのとれた食事は出来ていない。 ・全立腰、ノーテレビ、げんきカードの取り組みの状況は良い結果となっているのに対し、視力異常者が増えている。	・朝食摂取については今後もお便り、PTAと連携し家庭への周知を図る。 ・テレビやゲーム、スマホの利用については、保護タイムやお便り、保健委員会での活動、対象者への個別指導、PTAとの連携を図り、視力異常者が増えること、今後継続していく。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・時間外勤務時間を昨年より縮減することができたか	・やりがいを持って仕事に取り組む教職員の割合を80%以上にする。 ・時間外勤務時間が、昨年度平均の45時間38分を下回る。 ・自分の校務分掌を見直し、改善できた教職員の割合を80%以上にする。	・報告・連絡・相談の徹底を図り、学年や全体でそろえるべきところはそろえる。 ・前年度より勤務時間を減らすために、学年で目標を定め、声を掛け合う。 ・回覧版の活用で、会議や連絡会の時間を短縮するとともに、自分の校務分掌の改善を図る。	B	・仕事にやりがいを持って取り組んでいる職員が95.6%であった。 ・「働き方改革」の視点に立って自らの業務を見直そうとした教職員は77.8%と、目標の80%には達しなかった。 ・12月までの超過勤務時間の平均は48.1時間と、昨年度より増えている。しかし、年次休暇の取得率は、昨年度より多くなっている。	・今年度から進めている業務の見直しを進め、来年度は今年度より少しでも超過勤務時間が減るようになる。

●は共通評価項目のうち必須項目、○は独自評価項目